

【研究ノート】

カナダの大戦間期再検討

——第二次世界大戦後の外交との関係についての一考察——

末内啓子

1) 序

国際関係論をふりかえると、数多くの研究者が第一次世界大戦後から第二次世界大戦にいたる「大戦間期」に注目してきた⁽¹⁾。第一次世界大戦があまりに悲惨な結果をもたらしたので、深刻な戦争を二度と繰り返さないために、国際連盟 (League of Nations, 1920-1946) が設立された。ところが、アメリカ大統領のウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson) が主要な提唱者であったのに、アメリカは国際連盟に参加しなかった。そのために、この国際連盟の運営に、国家間協力をどの程度実現できたのかとの疑問が残った。そして、第一次世界大戦後、どうして第二次世界大戦に至ってしまったのかという問いを、国際関係論の多くの研究者はいまだに、引きずり続けている⁽²⁾。

大戦間期が注目される研究対象であればこそ、分析者はこの対象をどのように考察すべきかを問わざるを得ない。この分析には、複数のアプローチを相対化し、考察する時の国際関係にも目配りをする必要がある。たとえば、冷戦期には、大戦間期はどのように見えただろう。そして、いわゆる冷戦後の時代には、大戦間期はどのように見えているのだろうか。伝統的な国際関係論は、政治家と外交官などのエリートを中心とするが、エリートだけに注目して分析が可能なのだろうか。行為体の多様化という文脈で、国際連盟などの国際組織、そして民間組織などにも配慮すると、どのような研究が展開されるだろうか⁽³⁾。

本稿は、カナダの大戦間期が第二次世界大戦後

へと継続する性質を分析する。一方で計画的に準備していた側面があり、他方でアメリカとの相互依存の進行や国内の社会的矛盾など、第二次世界大戦後の課題へとつながる側面にも注目する。

カナダの対外関係についての研究は、これまで主に二つのグループに担われてきた。一つ目の歴史研究のグループは、大戦間期にカナダは国家として成長したと説明した⁽⁴⁾。たとえばカナダは英国の自治領として、英国の対外関係にも同時に包含されて、1894年には日英通商航海条約にも含まれた。カナダは、大戦間期に国際連盟に加盟し、1931年の英連邦帝国会議 (Imperial Conference) で日英同盟破棄を提案したと見做された⁽⁵⁾。その後、カナダは第二次世界大戦末期には連合側からの立場から、戦後のブレトンウッズ体制の構築に積極的に関わった。もう一つのカナダ外交研究のグループは、第二次世界大戦後のカナダの国際的な役割について注目し、カナダは英連邦や国際連合などの国際組織を舞台に、冷戦期に大国間の緊張のはざままで活躍したと説明した。諸研究は、この時期をカナダ外交のいわゆる「黄金期」と捉えた。国家としてのカナダと、政治家、外交官などのエリートが持つ能力に注目した⁽⁶⁾。この文脈の教育を受けた次世代は、さらに国内政治過程分析の充実をめざし、外交官だけではなく、国内の政策過程に関連して、他省庁や圧力団体などを含めた政治過程論としての分析を模索した⁽⁷⁾。

カナダの国家としての成長、そして戦後の国際的役割についての視点に加えて、本稿は大戦間期を分析するために第三のアプローチを模索する。かつて、歴史学者のB・ニートビー (Blair Neatby)

は、大戦間期と今日までの時代を連続の文脈で研究すべきだと提唱した⁽⁸⁾。つまり大戦間期が、その後さまざまな側面に影響しているので、大戦間期を長期的視野に位置づけて分析するべきではないかとの議論である。この文脈で、本稿は大戦間期から第二次世界大戦後への継続性を検討する。この分析の前段階として、大戦間期についてのこれまでのアプローチを再検討し、第三のアプローチを模索する。この作業では、カナダの第二次世界大戦後の対外関係の準備が大戦間期にあったのではないかとの新たな視点から見直すことにより、これまでの大戦間期研究の再検討ともなろう。大戦間期についての研究は歴史研究者に多くみられ、戦後期については国際政治学研究者が多いという特徴があり、本稿はそれら双方の研究分野の融合をも試みる。具体的には、大戦間期から戦後への継続を、対外関係、国際組織との関係、研究組織にも広げて考察を試みる。

さらに、本稿はあと二つの特徴を持つ。一つ目の特徴は、大戦間期と大戦後の関係をめぐり、カナダと日本のケースを比較することで、カナダの特徴を際立たせる。このカナダの大戦間期から戦後への継続は、日本の大国化志向、侵略と敗戦の経験との対比で検討できるだろう。つまり、カナダの戦後外交の展開は、大戦間期にすでに開始されていたのではないかとの議論を展開する⁽⁹⁾。二つ目の特徴は、国家エリートに焦点をしばり、国家間の外交の文脈で対外関係を分析する姿勢とは距離をとって、国家代表ではない民間の人々の動きをも分析視野に入れて、エリートに限定した議論を相対化する。

2) 大戦間期の諸相

第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の大戦間期が、国際関係論の一つの中核となってきた理由を端的に指摘すること自体は難しい。しかし、あえてその理由を探すと、大戦間期の始まりに重点を置く場合には、第一次世界大戦後に何をすべきだったのかとの問いがあった。そして、第二次世界大戦に至って大戦間期が終わることを重視した

場合には、なぜ再び世界的な戦争が始まってしまったのかとの問いがあった。本稿は第三のアプローチとして、大戦間期を第二次世界大戦後へと関連づける考察を試みる。

① 第一次世界大戦後としての大戦間期

第一次世界大戦は、地理的に広範囲に、生産組織にも民間人にも甚大な被害をもたらした。それゆえ、大戦の戦禍を何としても二度と繰り返さないことが、大戦間期初期の最大の課題であったと言えよう。だからこそ、国際連盟設立への動きがあり、ヨーロッパをはじめ、北米、アジアの63カ国が国際連盟に加盟した。その際には、第一次世界大戦の戦禍を共通認識として、国際的な危機を未然に回避することを目指していたといえるだろう⁽¹⁰⁾。しかしながら、アメリカが国際連盟に加盟できず、不完全な組織基盤となってしまった。国際組織への理想と国際政治の現実とののはざまで、乗り越えがたい新たなジレンマを生み出したとも言えよう⁽¹¹⁾。大戦間期初期には、国際的な民間組織もすでに活動していた。たとえば、太平洋問題調査会 (Institute of Pacific Relations, 1925-61) には、太平洋を囲むアメリカ、カナダ、中国、日本などの知識人が集まり、太平洋関係についての研究と、地域紛争を回避するための努力が、国境を越えて展開していた。

大戦間期には、すでに理想と現実のはざまのジレンマがあり、国家間の緊張と対立をどの組織で、どのように解決するべきかとの課題が顕在化しつつあった。

② 第二次世界大戦前としての大戦間期

大戦間期を検討するもう一つのアングルは、第二次世界大戦に至ってしまった大戦間期の後半に注目する。ナチズムの席卷やファシズムの台頭に対して、脅威が高まりながらも、どうして再び大きな戦禍に至ってしまったかとの問いこそが分析対象であった。たとえば、国際連盟の設立とその挫折という見方のように、国際的な危機から新たな大戦への突入という見方もある⁽¹²⁾。大戦の悲惨さを認識し、国際的に平和を追求する試みもあつ

て、国際関係の行方を決して看過していた訳ではなかったのに、それでも再び大戦突入となったことへの苦悩だったと言えよう。それは第一次世界大戦への深い反省がありながら、第二次世界大戦に至ったことへの後悔がにじむ問いかけだったのではないだろうか。

第一次世界大戦の経験をもとに、その後の研究では、どのような模索があったのだろうか。国際関係論では、第一次世界大戦後の理想主義と現実主義の対立、そしてそれらの不可分な関係のジレンマがあった⁽¹³⁾。理想だけでは現実から目をそらしがちで、現実認識が不十分となる。しかし現実を注視しようとする、現状肯定になりがちで批判しにくくなってしまう。当時の研究者の一人であるE・H・カー(E. H. Carr)に関しても、一方で現実重視と理解されながら、他方で理想と現実のはざまでの省察があったのではないだろうかとも見られている⁽¹⁴⁾。

③大戦間期と第二次世界大戦後の連続と非連続

大戦間期について第三のアプローチを模索する本稿は、大戦間期と第二次世界大戦後との連続性をキーワードに、以下の二つの側面を検討する。一つは大戦間期から戦後へと将来を見据えた準備の側面で、もう一つは大戦後から戦間期をふりかえてみると、準備になっていたという側面である。意図的だったことと、意図的ではなかったが後からふりかえると継続があるようだとの両側面を見ることになる。そして、時間的には対象が長期間となり、今日に至るまでの国際関係の特徴を検討することにもなる。

この第三のアプローチによる検討では、国家の政策や組織の合理性を前提としない。この設定では、計画的な政策で、将来へ向かって粛々と準備する国家のイメージとは微妙な距離をとり、国家が合理的に着々と変化に対応できるとも限らないとの立場である。したがって、大戦間期の出来事がすべて合理的に戦後につながるとは限らないという文脈での検討である。次に、戦後の出来事の理由をすべて大戦間期に求めないことである。この作業は、無理な因果関係づけを回避したい配慮

のためである。

④カナダの大戦間期と戦後の関係

本稿は、カナダ対外関係の大戦間期と第二次世界大戦後にどのような連続性があったかを検証するため、大戦間期に戦後のカナダの対外関係へ、どのような準備があったのかを問う。言い換えると、大戦間期の対外関係観が、第二次世界大戦後のカナダの対外関係を生み出していったのではないだろうか。この考察のヒントは、カナダと日本の比較にあるかもしれない。

この大戦間期には、日本もカナダも第一次世界大戦以前より大きな存在として国際舞台に登場した。日本もカナダも国際連盟に加盟した。新渡戸稲造は、国際連盟の事務局次長に就任した⁽¹⁵⁾。カナダは、イギリスの自治領の立場から独立国として国際連盟に参加した。ハーバート・エイメス(Herbert Ames)が事務局の財務担当幹部として入局した。このように、日本とカナダ両国は、国際連盟に加盟しただけではなく、事務局の中核にも組織的、人的に関係を築いていた。

ところが、第二次世界大戦の前後に、日本とカナダは対照的な道程を歩むことになる。日本は、いわゆる大国化と拡張主義を志向し、アジア諸地域への侵略を展開していった。満州への侵略は、国際連盟で非難され、そして日本は国際連盟脱退へと至った。その後の日本は、アジアへのさらなる侵略と国際的孤立状態に陥り、第二次世界大戦での敗戦へと向かった。日本は戦後の国際連合には当初からは参加できず、冷戦期の1950年代になって加盟し、その他の国際組織に次々と加盟した。このように、日本にとっての大戦間期と戦後との間には、大きな非連続があったと言えよう。敗戦後の占領や、国際組織に加盟するまでの時間を見るならば、戦前、戦中と戦後をスムーズな継続とは捉えにくかった。

他方、大戦間期のカナダは、英連邦の一国として英国との関係を重視して、英国の対外関係に含まれることが多々あった。対日外交においては、直接というよりは、英国を仲介しての日加関係という間接的な側面もあった。しかし、日本のアジ

ア侵略が進むにつれて、カナダは日本の対アジア政策を国際的に糾弾する立場にあった。日英同盟破棄への過程では、カナダの英国との協議も確認されている⁽¹⁶⁾。この過程では、国際連盟などの政府間関係に加えて、太平洋問題調査会やカナダ国際関係研究所（Canadian Institute of International Affairs, 1928-）⁽¹⁷⁾などの民間組織を基盤とした国際関係研究の拡充があった。また、カナダの場合は国際連盟から国際連合へ継続が見られる。この継続の議論は、大戦間期の特徴を分析することに加え、第二次世界大戦後のカナダ外交の源を大戦間期に探す作業となる。

3) カナダの大戦間期への視角

大戦間期のカナダの対外関係には、様々な変化があった。カナダは英国の自治領としての歴史があり、大戦間期に国際連盟に加盟し、外交権を樹立し、海外に大使館を開設し、日本には1929年に大使館を開設している⁽¹⁸⁾。一方で、英連邦内で、カナダはより自律的な存在となり、日英同盟破棄を英国に働きかけたように、英国の対外関係にも提案する立場にあり、当時から見た未来への展望も追求しつつあった⁽¹⁹⁾。他方、アメリカからの直接投資も増加しつつあり、対米関係の比重の増大が進行していた。カナダは連合国側に立ち第二次世界大戦に参加し、第二次世界大戦末期には大戦後を展望し企画する側にいた。カナダは第二次世界大戦終了前に、戦後の国際関係とその安定化を準備する国々の側にいたといえる。大戦間期と第二次世界大戦後の継続はどのような視角で分析できるのだろうか。

大戦間期と第二次世界大戦後の関係に継続性が見られるとすると、それは時系列的に見ても戦後のカナダ対外関係準備の一端が大戦間期に見出せるということであろう。その際に注目すべきは、時間的な設定を長期にすること、対外関係の変化、社会構造の複雑さ、外交官の活動、研究組織の拡充であろう。本論文では、①対英関係と対米関係、②カナダ外務省と外交官、③対外関係関連の民間組織と研究組織について検討を試みる。

①対英関係と対米関係の「はざま」で

カナダは、大西洋対岸のヨーロッパから離れていて第一次世界大戦の戦場にはならなかったが、英連邦の一国として、多くの人たちをヨーロッパ戦線に送った⁽²⁰⁾。従軍せずとも、多くの人たちが国内でも戦時体制に巻き込まれていった。病院などの医療の現場、生産の場で、戦争への関与を支えた人々もいた。大戦間期について、英帝国のメンバーとしてのカナダが、国家として成熟する過程を強調する傾向が強い。その結果、カナダの英帝国内の位置や国家としてのアイデンティティは、大戦前と比較してもより強化されたと見做される⁽²¹⁾。

だが、大戦間期には、カナダにとって対米関係が経済的により重要になっていった。英国との経済関係は、歴史的に多岐にわたっていた。たとえば、英国とカナダの財界組織には重複した幹部がいた。そして、カナダへの経済進出は株投資の間接投資でもあった。対照的に、アメリカは資源、機械産業などへの直接投資であった。ここでの重要な問題は、政治外交上の自律化が実現されつつある過程で、経済的対米関係の密接化であった。大戦間期のアメリカの経済的大国化を考慮するならば、単純に対米関係の深化とはいいがたかった。特に、アメリカからのカナダへの直接投資は、安価な原材料と労働力を求めた訳ではなく、カナダの労働力の質の高さと購買力のある市場が理由であった。1960年代後半の対米ナショナリズムは、対米依存に対する危惧を基盤としていたが、対米関係の相互依存はカナダ経済にとって不可欠とも見做された。その延長上に、1989年の米加自由貿易協定、1994年にはメキシコも含めた北米自由貿易協定締結があり、そして2020年の北米自由貿易協定の改定へとつながっている。大戦間期には、対米関係に潜む偏重と機会の微妙なジレンマがすでに生まれつつあった。

大戦間期に見られた英国との強い絆は、皮肉にもカナダ国内では分断を生んでいた。英連邦の一員であり、第一次世界大戦には英国とともに参戦した。ところが、派兵のための徴兵制は、カナダでは誰にでも受け入れられたわけではなかった。

国内で英語系住民に次ぐ人口規模のフランス語系住民は、英国と同一化するナショナリズムには同調できなかったので、徴兵制は国内を二分しかねない対立を生んだ。徴兵制はフランス語系の人たちにとって、なぜ英帝国に軍事的な貢献を強制させられるのかとの反発となり、英国との緊密化には違和感があり、多くは徴兵制に反対であった。フランス語系住民が集中するケベック州は中央の連邦政府と対立し、国際関係の基軸をどこに求めるべきだろうかとの問いとも関連していた。

この英語系とフランス語系グループの対立は、第二次世界大戦後にも様々な対立と融和を繰り返してきた。1969年の公用語法で、英語とフランス語を公用語とする法律ができ、さまざまな公的サービスを二言語で提供することになった。けれども、ケベック州の独立を目指す政党（ケベック党、ケベック・ブロック党）もそれぞれ州レベルと連邦レベルで登場した。フランス語系住民が多数派であるケベック州では、1980年、1995年に分離・独立を模索する住民投票が実施されたが、採択されなかった。もちろん、背景にはケベック州に対する自由党連邦政権の連邦維持政策があった。

その上、最近の研究は、戦時経済体制に巻き込まれた国内の多種多様なグループに言及しつつあり、国内の利害の多様性は英語系住民とフランス語系住民だけに限定されなかった。たとえば、従軍した軍人に加えて、戦線に赴いた女性医療関係者、カナダ国内の女性工場労働者についての研究も進んでいる。これらは、国内の多様性について、これまでの研究であまり注目されなかった集団の視点を取り入れて、カナダを単数形で議論することと明確に区別している。このように最近の研究は、異なる地域、階級、ジェンダー、エスニック・グループが、どのように社会の危機的状況を潜り抜けたかを分析している⁽²²⁾。

大戦間期で看過できない1929年の大恐慌は、国際的にもカナダにも多大な経済的困難をもたらした。カナダ国内の経済状況が悪化し、雇用の不安定化と失業者の増加から労働運動が激化し、社会主義的な運動で協同連邦党（Co-operative

Commonwealth Federation）も誕生した。その政党は今日の新民主党（New Democratic Party, NDP）へと継承され、労働運動や都市生活者を支持基盤とし、社会民主主義的な政策を提示してきている。NDPは自由党と保守党からなる二大政党制のはざま、これまで第三政党の困難な立場でありながら支持を確保してきている⁽²³⁾。

対外関係と国内の問題との繋がりをも含め、大戦間期にすでに存在した課題が変化しながらも、解決されないまま今日に至っているとも言えよう。

②カナダ外務省と外交官

外交の自律については、カナダの国際組織での活動に言及して議論する機会が多い。つまり大戦間期の英連邦、国際連盟、そして戦後の国際連合との関係などが注目を集めた。

カナダ国内の国際連盟支援機関であるカナダ国際連盟協会（League of Nations Society in Canada, LNSC, 1921-1942）には、当初から研究者、知識人、政治家などの会員も多く、国際的な協調を目指した。これは、第一次世界大戦を反省して国際的な危機を回避し乗り越えるために国際的協調を提唱したと言えよう。LNSCは当時すでに、*Interdependence*というタイトルの機関誌を刊行していた⁽²⁴⁾。つまり、すでに国家が行為体として主権を主張するにも他国との協調が大前提ということであった。1970年代にロバート・コヘイン（Robert O. Keohane）やヨゼフ・ナイ（Joseph Nye）の研究で話題となった「相互依存」（“interdependence”⁽²⁵⁾）を先取りするかのように、国家間協力で国際的困難を乗り越えるべきとの新機能主義的な文脈がすでに提示されていた⁽²⁶⁾。カナダが、英連邦での国際関係に加えて、国際連盟という新たな土俵で、第一次世界大戦を反省し、国家間の紛争が戦争、大戦に発展しないことを目標に、協調による紛争回避を追求する志向が強く出ていた。そして国際連盟から国際連合への展開は、カナダにとっては後に述べるように継続上にあった。

ところで、第二次世界大戦後のカナダの対外関係には、一見矛盾するような二つの議論がある。

一つは冷戦期の国際紛争の仲裁、旧ソ連との接触など、いわゆる国際的役割の黄金期とも称賛される時期である。もう一つは、その後の対外関係における活躍の低迷を憂い「カナダはどこに？」と問う時期である。皮肉にも、過去の黄金期を強調すればするほど、その後の低調ぶりとの対比に傾倒しがちになってしまった。一見矛盾しているように見えるが、実はカナダの国際システムでの位置の模索という点では共通している。このような国際システムでのカナダの模索は、大戦間期の国際連盟、第二次世界大戦後の国際連合でも実施されている。たとえば、二人のカナダ外交官、レスター・B・ピアソン⁽²⁷⁾ (Lester B. Pearson, 1897-1972) とエスコット・リード⁽²⁸⁾ (Escott P. Reid, 1905-1999) に注目して、大戦間期と第二次世界大戦後の時期を検討してみよう。

ピアソンは、牧師の家に生まれ、トロント大学、オックスフォード大学を経て外交官となった。オックスフォード大学留学中にピアソンは、後にカナダの外務省、内閣府 (Privy Council) の中核を担う人たちとの交流があった⁽²⁹⁾。ピアソンは第一次世界大戦をヨーロッパ戦線の兵士の立場で経験し、そして外務省入省後の1930年代にはロンドンの大使館に相当するハイコミッション⁽³⁰⁾ 勤務で外交官としてナチズムの席卷するヨーロッパを経験していた。ピアソンは、大戦間期にはカナダ国際連盟協会にも関係していた。その後外交官としての経験をさらに積み、本省と駐米大使館勤務などを経て、国際連合創設のために第二次世界大戦終了前に開催された国際会議にも参加していた⁽³¹⁾。第二次世界大戦後、ピアソンは外務事務次官、下院議員、外務大臣、首相となった。中東和平交渉への貢献が認められ、ピアソンのノーベル平和賞受賞へとつながったと見られている。ピアソンは、カナダの国際協調路線、国際組織での華やかな外交の象徴ともなった。

もう一人の外交官の例であるリードは、ピアソンよりも少し若く、ピアソンと同様に牧師の家に生まれ、父親の教区内の貧困層の問題にも早くから目を開いていた⁽³²⁾。リードもトロント大学卒業後、ロード・スカラシップでオックスフォード大

学に留学し、研究者の道を歩み始めた。彼の場合は、トロント大学の学生の時から国際連盟に期待を寄せ支持していた⁽³³⁾。帰国後は、1928年に新しく設立されたカナダ国際関係研究所の事務局長に就任し、1934年にカナダ国際連盟協会の会長となり、国際連盟をサポートすることと、社会教育、世論形成にも活動の重点をおいていた⁽³⁴⁾。その後、リードは外務省に入省し、上司であるピアソンと働く機会もあった。駐米大使館にも勤務し、国際連合創設のための国際会議に出席していた⁽³⁵⁾。第二次世界大戦終了前には、アメリカを中心とした新しい国際システムができようとしていたが、リードは、カナダがアメリカの外交政策に巻き込まれることに、やや躊躇があったといわれる⁽³⁶⁾。第二次世界大戦後、カナダ国際連盟協会はカナダ国際連合協会 (United Nations Association in Canada, 1946-) へと移行した。リードは、駐インド大使を最後に外務省から引退したが、その後ヨーク大学グレンドン・カレッジの総長にも就任した⁽³⁷⁾。

ピアソンやリードのように、外務省や国際組織で活躍したカナダのエリート外交官の活動をみると、大戦間期とその後にはより大きな責任をもつ立場でカナダの対外関係に関わってきていた。大戦間期からの相互依存の概念と大戦後のカナダの国際的役割、アメリカとの相互依存など、国際協調を追求する新機能主義的なトーンの継続が見られる。しかし、カナダの国際的役割を求めるが故に、ピアソンやリードの華々しい事例との比較は、その後の対外関係に達成感を模索せざるを得ない傾向が出てきた。

③研究・教育組織の強化

大戦間期と第二次世界大戦後の関係で看過してはいけないのは、カナダの対外関係に関する研究・教育機関拡充である。

ピアソンやリードについてのこれまでの説明でも、すでに研究者と研究機関、そして外務省関係者のつながりが浮かびあがってきている。たとえば、リードのように、研究者とカナダ国際連盟協会、カナダ国際関係研究所、そして太平洋問題調査会には、重複する会員、幹部が存在していた。

重複する会員の活動とそのネットワークを通して、研究機関の密な相互関係があった。また、社会再構築連盟 (League for Social Reconstruction) は、大戦間期には進歩的な知識人のネットワークと見られていたが、リードも微妙な距離を取りながらもその会員との交流があった⁽³⁸⁾。

そこで、大戦期間中に形成され、機構化されつつあった研究組織や社会運動との関係について考えてみたい。研究機関が拡充されつつあった大戦間期には、ちょうど大学において国際関係、国際関係史などの科目が創設されつつあり、カナダ外交についての専任教員も着任しつつあった。カナダ外交研究の初期の世代には、ジョン・ホームズ (John W. Holmes) やペイトン・ライオン (Peyton V. Lyon) のように、オックスフォード大学留学後にカナダに帰国し外交官となり、その後研究者となり大学でカナダ外交について教育と研究に携わった人たちがいた。つまり、ホームズとライオンは、実務家からの転身グループである。彼らの研究では、実務と教育の統合がなされ、一部には国際関係論の大学院が実務家養成を目的に作られ、実務家と研究者が教員となった。

研究者と実務家、そして教育者が、相互の交流も含め、重層的な関係を築いてきていた。その構築が、さらなる相互のポジションの移動によって、対外関係についての実務と研究、教育の連携を形成していったのだろう。やはり相互の交流、協働の経験は、一夜にしては確立できない組織と知見の蓄積につながっていったとはいえないだろうか。

このように、大戦間期の知識人のサークルは、組織的に相互に会員を重複する特徴があった。つまり、カナダ国際連盟協会、そしてカナダ国際関係研究所や太平洋問題調査会といったように、多くの関係者が同時期に複数の組織で活躍していた。単なる重複ではなく、人間関係のつながりで研究成果の共有や大学でのカナダ外交の科目開講にもつながった。そこでは、さらに、外交官、また彼らのオックスフォード大学時代からの交友関係と同時に重複した人間関係があった⁽³⁹⁾。そのような密な人間関係のサークルの中から、さらに次

世代の外交官が生まれ、研究者が生まれ、研究、人、組織を通して、大戦間期と第二次世界大戦後のカナダ対外関係を担当する実務家、研究者、国際連合支援者へと引き継がれていったと言えよう。

4) 結

最近のカナダは、国際関係においてどのような活躍ができているのだろうか。この問いは、くり返されてきている。なぜなら、カナダが英連邦や国際連合での活動などの冷戦期の経験と、最近の外交が低迷している印象とのギャップがあるからである。では、カナダの対外関係のルーツは、どこに見出だされるのだろうか。第二次世界大戦後の華やかな外交の黄金期だけに注目することで充分なのだろうか。

第二次世界大戦後のカナダの対外関係の源泉について、本稿は大戦間期と第二次世界大戦後の継続にあるのではないかと検討を試みた。長期的視野で考察し、対外関係、国際組織との関係、教育・研究組織との関係の視点から再検討した。そこで、発見されたのは、人と人との繋がりから生まれる実務家、研究者、教員の融合した場の創設と維持であり、知見の共有や専門家の育成があった。研究機関、民間組織、大学でのカナダ外交に関連した科目を通しての教育などの重層的な関係が、外交を検討する基盤となっていた。したがって、大戦間期にすでに第二次世界大戦後の構想につながる人、グループ、組織などがあったといえよう。いわゆる大戦間期から第二次世界大戦へと向かう過程には、これらの連続する側面が存在した。

しかし、これらの大戦間期と第二次世界大戦後の継続性は、計算し尽くした準備の結果というよりは、国際関係の変化の中で、カナダの国際的な位置の模索によるものでもあった。この文脈で、大戦後の展開の一部は大戦間期に源があったが、国際環境は既に変化していて、計画通りにはいかなかった場面もあり、国家の合理性ですべてを説明できてはいなかった。

つまり、カナダの対外関係をふりかえると、その戦後の特徴は、第二次世界大戦後になってから始まったわけではなかった。歴史的な軸をふりかえっても、大戦間期が持つ特徴から、第二次世界大戦後の時代へと継続が見られ、大戦間期を抜きにして戦後の対外関係の展開は考えにくいということである。非歴史的な政策決定に批判的となる政治経済論の影響がある研究では、やはり時間軸、しかもより長期的変化と継続に注目しがちである。表面的な変化よりも、より長期的な構造的変化が、いつ、どのように表面化するかの問いが不可欠である。

大戦間期と第二次世界大戦後を分断した見方では、両方の期間の継続性が見落とされてしまう。ふりかえると、大戦後の国際システムは戦勝国を中心に再構築された。それも、第二次世界大戦末期に既に協議が開始されていて、その協議に参加したのは、大戦間期にすでに外交官となっていたエリートであった。また戦勝国という行為体間の関係は、大戦間期にすでに確立されていた。また、英連邦、国際組織でのカナダの役割の模索は、戦間期にすでに開始されていた。戦間期についての多角的な分析が、より複雑なプロセスを理解する一助となるであろう。

カナダの国際的役割を強調する見方は、第二次世界大戦後だけに限定されるものではなく、その実質的な準備はすでに大戦間期に始まっていたと見るべきである。少なくとも、知的な文脈での検討は大戦間期から始まっていた。その際に重要なことは、人と人との繋がり、組織間の結びつきなどが、研究や政策と密に関連していたことであろう。

この検討から導かれることは、以下の三点となる。一つには、大戦間期分析の既存の方法を相対化し、その過程でアプローチを模索することが重要であろう。第二点として、対外政策分析は、短期的な議論になりがちであり、それは実務家の側で功績を強調する場合にも見られがちである。また、分析者の方でも、今日の国際関係の変化のスピードを考えると短期的な分析になりがちである。だからこそ、あえて長期的、多角的な視点を

必要とするのではないだろうか。第三点として、国家の合理性を否定はしないが、当然としない検討も少なからず意味があるだろう。

最後に国際関係を分析するにあたり、歴史的な側面の研究と政治的な側面の研究をどのように融合して展開すべきか。これからも重要な挑戦となるだろう。

注

- (1) “interwar period”を「两大戦間期」と呼ぶ場合もあるが、この論文では「大戦間期」を使う。
- (2) 以下を参照。E.H. Carr, *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939* (New York: Palgrave, 2001). (originally published in 1939) E・H・カー著、原彰訳『危機の二十年』岩波文庫、2011年。
- (3) 木畑洋一「国際関係史研究と两大戦間期」『国際政治』122号、1999年、1-3ページ。
- (4) Frederic H. Soward, *Canada and the League of Nations* (Ottawa: The League of Nations Society in Canada, 1931), p.11.
- (5) 大原祐子「日英同盟廃棄問題に果たしたカナダの役割と日本の反応」『国学院大学紀要』15号、1977年。
- (6) 大国でも、小国でもなく、国際的な役割を積極的に取り組むモデルとしてのミドル・パワーとしてのカナダについて、以下を参照。末内啓子「外交政策研究の変遷と模索——1960年～1990年」『カナダ研究年報』11号、1991年。
- (7) たとえば、Kim Nossal, *Politics of Canadian Foreign Policy* (Scarborough: Prentice-Hall, 1985).
- (8) H. Blaire Neatby, *The Politics of Chaos: Canada in the Thirties* (Toronto: Macmillan of Canada, 1972), pp.1-5.
- (9) 日本の国際連盟の関係者とその後の国際連合の関係者については、以下を参照。篠原初枝「国際連盟の遺産と戦後日本」『アジア太平洋討究』第20号、2013年。
- (10) カナダで国際連盟を支援するカナダ国際連盟協会 (League of Nations Society in Canada) では、第一次世界大戦につながったような国際的な危機を回避する目的が強調された。League of Nations Society in Canada, *A New World of the League of Nations* (Ottawa: League of Nations Society in Canada, 1933), p.5, p.12.
- (11) 国際連盟の理想と現実のジレンマについては、篠原初枝『国際連盟——国際平和への夢と挫折』中公新書、2010年などを参照。
- (12) Ibid.
- (13) カー『危機の二十年』。
- (14) 末内啓子「リアリズムとネオリアリズムの国家中心モデル——理論と規範の関係の一考察」『国際政治』101号、1992年。

- (15) 日本と国際連盟については、たとえば以下を参照。岩本聖光「日本国際連盟協会——30年代における国際協調主義の展開」『立命館大学人文科学研究所紀要 85』2005年。篠原初枝「国際連盟の遺産と戦後日本」。佐藤全弘『新渡戸稲造の世界——人と思想と動き』教文館、1998年。
- (16) 大原祐子「日英同盟廃棄問題に果たしたカナダの役割と日本の反応」。
- (17) カナダ国際関係研究所の設立に関しては、以下を参照。末内啓子「カナダ国際関係研究所 (Canadian Institute of International Affairs, 1928-2007) 設立と国際関係研究——カナダの大戦間期における国際関係観形成の構造」『研究所年報』(明治学院大学国際学部附属研究所) 13号、2010年。カナダ国際関係研究所は、2006年にカナダ国際カウンシル (CIC, Canadian International Council) に改組された。
- (18) 1929年にカナダ大使館を開設する以前にも、カナダの貿易コミッショナー (Trade Commissioner) のオフィスが横浜港地域に設置されていた。
- (19) Address delivered by the Right Hon. W. L. Mackenzie King, November 9th, 1928, at the banquet of the League of Nations Society of Canada, The Chateau Laurier, Ottawa.
- (20) 『クマのプーさん』の話に出てくるクマは、カナダから英国に派遣された部隊と一緒に英国に行ったといわれている。
- (21) Neatby, *The Politics of Chaos*, p.5.
- (22) たとえば、以下の研究を参照。Elizabeth Armstrong, *The Crisis of Quebec, 1914-1918* (Toronto: McClelland and Stewart, 1974), first originally published in 1937. Tim Cook, "Battles of the Imagined Past: Canada's Great War Memory," *Canadian Historical Review*, 95:3, 2014. Margaret Macdonald, *Imperial Daughter* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 2005). Susan Mann, *The War Diary of Clare Gass* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 2000). Robert Rutherford, *Hometown Horizons: Local Responses to Canada's Great War* (Vancouver: University of British Columbia Press, 2004).
- (23) 二大政党の優位に比較して、第三政党の困難な状況については、以下を参照。Janine Brodie, and Jane Jensen, *Crisis, Challenge and Change: Party and Class in Canada* (Toronto: Methuen, 1980).
- (24) League of Nations Society in Canada, *A New World of the League of Nations* (Ottawa: League of Nations Society of Canada, 1933), p.12. Senator Cairine Wilson, President of the League of Nations Society in Canada, Introducing the title of Journal *Interdependence* in 1928, National Archives of Canada, League of Nations Society in Canada, MG30 C187, vol.8, File 378.
- (25) Robert O. Keohane, Joseph S. Nye Jr., *Power and Interdependence: World Politics in Transition* (Boston: Little, Brown, 1977).
- (26) カナダの国際協調志向の源をデービッド・ミトラニー (David Mitrany) に見出す研究もある。Or Rosenboim, *The Emergence of Globalism: Visions of World Order in Britain and the United States* (Princeton: Princeton University Press, 2017), pp.43-46.
- (27) たとえば, Andrew Cohen, *Lester B. Pearson* (Toronto: Penguin Canada, 2008) を参照。
- (28) Escott Reid, *Radical Mandarin: The Memoirs of Escott Reid* (Toronto: University of Toronto Press, 1989). Greg Donaghy, and Stéphen Roussel, "Escott Reid: A Liberal Idealist in a Hard-Power World," in Greg Donaghy, and Stéphen Roussel. eds. *Escott Reid: Diplomacy and Scholar*. (Montreal: McGill-Queen's University Press, 2004). J. L. Granatstein, "Becoming Difficult: Escott Reid's Early Years," in Greg Donaghy, and Stéphen Roussel. *ibid.*
- (29) カナダの大学でトップレベルの卒業生は、ロード奨学金を受けて、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の大学院へ留学する機会があり、将来の職業的な可能性も広げた。同奨学金は官僚、外交官に加え、多くの大学教員など研究者も排出してきた。
- (30) 英連邦諸国へのカナダの代表部は、大使館ではなく、ハイコミッションと呼ばれる。
- (31) Cohen, *op. cit.*, pp.83-84.
- (32) Reid, *Radical Mandarin*, pp.13-14.
- (33) *Ibid.*, p.27.
- (34) National Archives of Canada, MG30 C187, League of Nations Society in Canada, vol.1. File 1, Report of Special Committee appointed to re-consider the policy of the Society to the Central Executive Committee, Ottawa, September 4, 1930, pp.5-6.
- (35) Reid, *Radical Mandarin*, pp.190-192.
- (36) J. L. Granatstein, *Canada's War: The Politics of Mackenzie King Government, 1939-1945* (Toronto: Oxford University Press, 1975), p.324.
- (37) 国際組織でのカナダの位置を別の角度からとらえ直すため、大戦間期から第二次世界大戦後へと、カナダ外務省、国際連盟、国際連合とつながる人物として、ピアソンとリードを見たが、自由党上院議員であったカリン・ウィルソン (Cairine Wilson) はカナダ国際連盟協会の幹部でもあり、また民間の支援組織 (その後非政府組織とよばれた) を積極的に支援してきた人もいた Cairine Wilson については、以下を参照。Valerie Knowles, *First Person: A Biography of Cairine Wilson: Canada's First Woman Senator* (Toronto: Dundurn Press, 1988).
- (38) Reid, *Radical Mandarin*, p.115.
- (39) 緒方貞子は、日本でも国際連盟協会と太平洋問題調査会の会員に二重、三重の連携があったとしている。緒方貞子「国際主義団体の役割」細谷千博、斉藤眞、今井清一、嶺山道雄編『日米関係史 3』東京大学出版会、1971年、316ページ。

参考文献

【第一次資料】

National Archives of Canada (NAC)
League of Nations Society in Canada, MG30, C187,
Vol.1-10.
Escott Reid Paper, MG31, E46.

【第二次資料】

岩本聖光「日本国際連盟協会——30年代における国際協
調主義の展開」『立命館大学人文科学研究紀要 85』
2005年。
大原祐子「日英同盟廃棄問題に果たしたカナダの役割と日
本の反応」『国学院大学紀要』15号, 1977年。
緒方貞子「国際主義団体の役割」細谷千博, 斉藤眞, 今井
清一, 嶋山道雄編『日米関係史 3』東京大学出版会, 1971
年。
佐藤全弘『新渡戸稲造の世界——人と思想と動き』教文館,
1998年。
篠原初枝『国際連盟——国際平和への夢と挫折』中公新書,
2010年。
篠原初枝「国際連盟の遺産と戦後日本」『アジア太平洋討
究』第20号, 2013年。
末内啓子「外交政策研究の変遷と模索——1960年～1990年」
『カナダ研究年報』11号, 1991年。
末内啓子「リアリズムとネオリアリズムの国家中心モデル
——理論と規範の関係の一考察」『国際政治』101号,
1992年。
末内啓子「カナダ国際関係研究所 (Canadian Institute of
International Affairs, 1928-2007)設立と国際関係研究——
カナダの大戦間期における国際関係観形成の構造」『研
究所年報』(明治学院大学国際学部付属研究所)第13号,
2010年。
末内啓子「大戦間期のカナダの国際関係——エスコット・
リード (Escott M. Reid, 1905-1999) のジレンマの視角
から」『国際学研究』50, 2017年。
Armstrong, Elizabeth. *The Crisis of Quebec, 1919-1918*.
Toronto: McClelland and Stewart, 1974, (first originally
published in 1937).
Brodie, Janine, and Jane Jensen, *Crisis, Challenge and
Change: Party and Class in Canada*. Toronto: Methuen,
1980.
Carr, E. H. *Twenty Years' Crisis*. New York: Palgrave, 2001.
(originally published in 1939) E・H・カー著, 原彬久訳『二
十年の危機』岩波文庫, 2011年。
Cohen, Andrew. *Lester B. Pearson*. Toronto: Penguin Canada,
2008.
Cook, Tim. "Battles of the Imagined Past: Canada's Great
War Memory." *Canadian Historical Review*, 95:3, 2014.
Donaghy, Greg, and Stéphen Roussel. "Escott Reid: A Liberal
Idealist in a Hard-Power World." in Greg Donaghy, and
Stéphen Roussel. eds. *Escott Reid: Diplomacy and Scholar*.

Montreal: McGill-Queen's University Press, 2004.
Granatstein, J.L. *Canada's War: The Politics of Mackenzie
King Government, 1939-1945*. Toronto: Oxford University
Press, 1975.
Granatstein, J.L. "Becoming Difficult: Escott Reid's Early
Year." in Greg Donaghy, and Stéphen Roussel. eds. *Escott
Reid: Diplomacy and Scholar*. Montreal: McGill-Queen's
University Press, 2004.
Keohane, Robert O., and Joseph S. Nye. *Power and
Interdependence*. Boston: Little, Brown, 1977.
Knowles, Valerie. *First Person: A Biography of Cairine
Wilson: Canada's First Woman Senator*. Toronto: Dundurn
Press, 1988.
Macdonald, Margaret. *Imperial Daughter*. Montreal: McGill-
Queen's University Press, 2005.
Mann, Susan. *The War Diary of Clare Gass*. Montreal: McGill-
Queen's University Press, 2000.
Neatby, Blair H. *The Politics of Chaos: Canada in the Thirties*.
Toronto: Macmillan of Canada, 1972.
Nossal, Kim. *Politics of Canadian Foreign Policy*. Scarborough:
Prentice-Hall, 1985.
Reid, Escott. *Radical Mandarin: The Memoirs of Escott Reid*.
Toronto: University of Toronto Press, 1989.
Rosenboim, Or. *The Emergence of Globalism: Visions of World
Order in Britain and the United States*. Princeton: Princeton
University Press, 2017.
Rutherford, Robert. *Hometown Horizons: Local Responses to
Canada's Great War*. Vancouver: University of British
Columbia Press, 2004.
Soward, Frederic H. *Canada and the League of Nations*.
Ottawa: The League of Nations Society in Canada, 1931.